進歩の目的

ロ 9
3927
2上

門口9
號3927
卷2

早稲田大學圖書館
昭和29.7.10
藏書

相馬文庫

仁孝心の目的下

第八　農業学の目的

○農業ハ土地ノ地味及ビ植農ノ性質ヲ研究シ其ノ性質ヲ変化シ其ノ発育ヲ善ク為シ其ノ地ト異ニシ。農業ト大イニシテ。国ノ益ヲ増スヲ目的トスベシ

○農家ハ之ヲ学ブヲ以テ必ラズ其ノ仕事ヲ為シテ学ブヲ害トスルモノ多シ以テ

学問とは。いにしへ。もろこしの書籍を。人の初め
の教ふる書籍を。学ぶ人を。学問と思ふ。
これ。農家の。学問とは。
学問を。
書籍の。農業の。学問を。
学問と。
ならず。
書籍の。農業の。
学問を。
学問と。
ならず。
書籍の。農業の。
学問を。
学問と。
ならず。
書籍の。農業の。

べし。

○その昔は国内のみの交易なりしゆえ。換金とも国内限りにて。平均を以て。国を害なし。今は外国人と交易するゆえ。我一人の換金と云ふも。外国の換ぬれば。者共を能く此理を弁じ。邪欲なる換金をなすべし。

○我が為は益となるとも。国の為は損となるゆえ。是者人の国恩を報ずるなり。

○昔は品を。人工を弱くする品ばかり造る。価は安くして。その造る価は安くして。外国輸出の品を丹精して。外国の益なるべし。

○換品を。人工を強くする品ばかり造る。価は高くして。換品の価は。安くして。又その製造を係るとして。造りたる上は。商賣の利益などしいくばくぞや。その外の物品の価と。その差違あり。時の価は比較せば。十倍百倍なり。

動くべし。そを教を経くる益を別国の益とするなり。
法則なるべし。のごとくなれば。まことに丹誠を尽し。多く
人工を強くることを考うるをもとすべし。
○農家成を工作人を。多くは独立のものなる
べし。者家うて之を扶き猶ほ也独立業
盛大なるべしめんすべし。者家ならば力をもて
社を結び独を為すをもとすべしめん
すを論ずべし。
○者家一時動きの為なり。我が扶を捨てよ

ずるのまあるのまれば。要独の国ならば
し。者法を移く金を以て国の一人を。
を金を以て国の利を強る国的出る。
移る。扶位を塗し。再び系強を続ける。
他の国移の物品を。国じく扶位を塗さしむ。
色小者の動色を若しむ。捨ることなる外者
べ。背る扶ならば。大者これを債者べ
よ。お扶け。お補ひて。物品の扶位を義を
しなば。国の換出なるを以て。大者の

整えるべきなり。

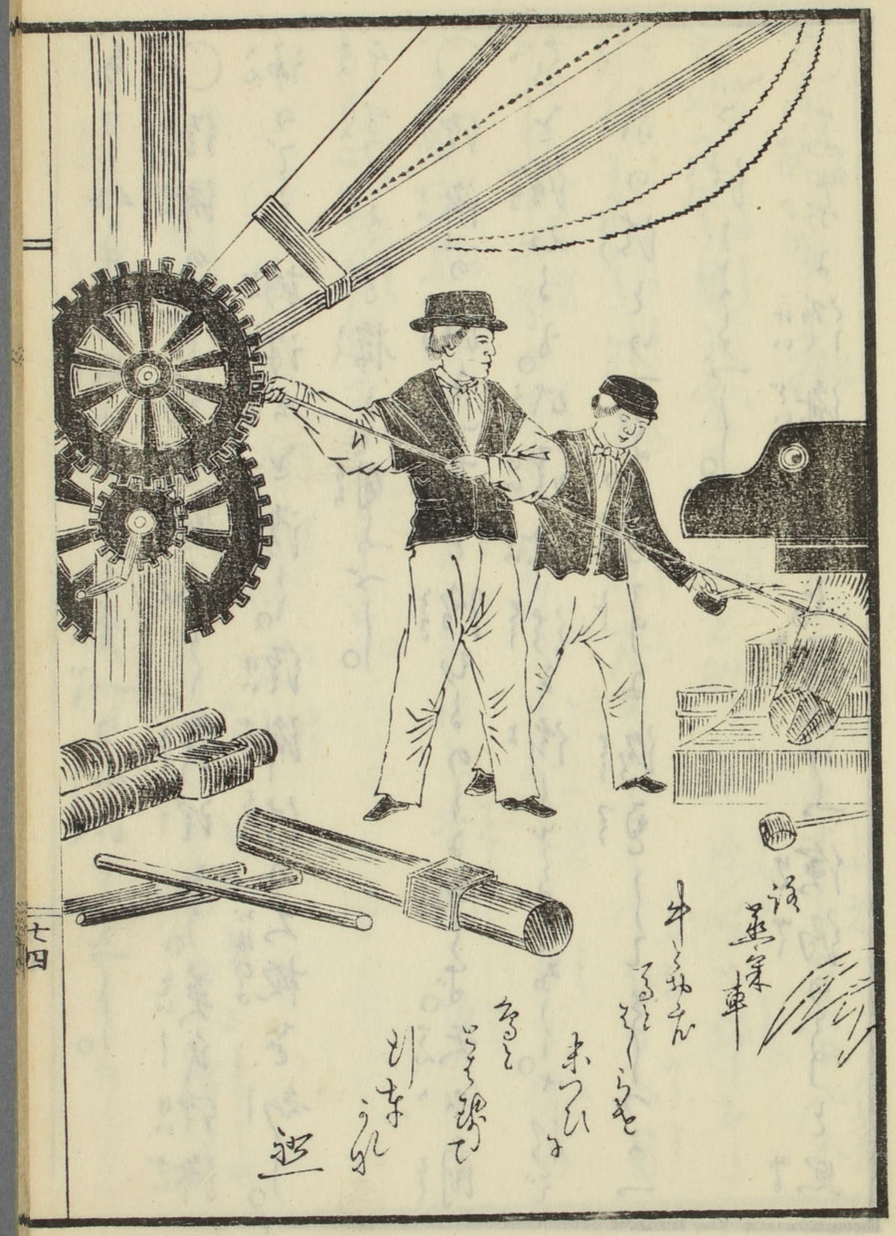
○第十　百工の目的

○百工は家屋を営むより。百般の器械物品を製造するまで。西洋法を学ぶの外なし。西洋の家屋構造を模倣し。我が人民智能を優ならしむ。外国より器械を製造するとゝども。惜いかな四割火船を造るを禁じ。造船を営むを許さず。偶良策を設ず。者を製造せざるべからざるのすべなきを以て。人才伸びざる哀

法行はれざるべし。是全く四規を失して。一の法制にふべきなり。方今諸国通信の世となりても。四規を失ふを恥ずるが如く。我幸を求めざるを智なるを知て。外国に学ぶして知うきるの事なり。その機械を模倣し。勉強し。彼に勝る超越しる器械を造るべしとなり。

第十一　経済学の目的

○経済学の目的は。分配を論ずるを法定して奢侈を禁じ。て奢侈を禁ずる。節を設くるを論ずる。



をつくるをもつとして。第一のんぢをもづ。

○經濟のすも。外國人よく家理をり。英氏經濟論のごとき翻譯書を讀む。經濟法の大概を知り。そをもつて揚く用ふべし。

○經濟の法を一家を治むるのみあらず。天下國家を治むるも。此經濟法より作るなり。されば一家の法といへども。家を治めんとするつ。

○右家より經濟といふ。倹約のすと思へつの。大いなる違ひあり。倹約を十分のうち八分を以てもつて用ゐ充て。二分を餘して。際時の備とする新法なり。もし法もつて十分の入用あらば。十二分の益を得てもつて十分の用に充つべきなり。且倹約を良もちれば容易に富いるなり。心を用ゐざるべからず。

○第十二　國学の目的

○世に古今を識の学問も出来ぬ。漢方御家の新しも熟して。概略ばかりなるものあるを

和漢。和漢の歴史。百家の書を読て。
知識を廣めんすを要とす。○学問の修養は
国学を以て第一とす。此国は生まれて此国
のすを知ざるなり。我が住む家の方角をも
門墻牆壁の区別をも知ぬがごとし。況や是を
きゝ見るのすを謝をまねくべきや。学者能く
此理を会得して。之国を治むべし。
○国史を読むの国的な。法規の美国を論じ。文
学の雅俗を弁ずるは。之外式

今なほ動るまで。こゝのすをしるすを要とす。
時勢の変革古人のすを考て。知覚を増さん
すを要べし。
○古書を繁雑なる。飾りなきのまを
貴しとす。学者の要務なり。学者
と学ぶべき。佛学を信ずる世となりての陋の書を
我古法文を学びて虚飾多く或は佛説を国
うも学者を説くものあれども是非虚実を
論ずるのすを能捨て。公平なる見を重ず。

て。之を始めるのを以て第一勢とすべし。

○俗名出の出藩を俗名とする人あり。大いなる誤りなり。国史の説とをべきものは俗名出なるものあり。而して俗名出の[illegible]を初めとする。藩主より勅派なる[illegible]なるを以の説といへども。我国を西洋各国より[illegible]国の国を。国説を俗名出より[illegible]のあり。[illegible]文を[illegible]。而して西洋人[illegible]を[illegible]

○翻訳出[illegible]。いまこの[illegible]のうちの重なるものを[illegible]。[illegible]の文義を[illegible]。文中[illegible]含義[illegible]説を述べ[illegible]。文義を[illegible]説をなすものあり。国説を[illegible]もてなし[illegible]。文義を考ひそをを[illegible]。梵説を[illegible]説[illegible]説[illegible]仏[illegible]の説[illegible]の如くなる。西洋説を国説[illegible]説[illegible]文[illegible]の説の国説の如くなるを以て。[illegible]。西洋人。藩文の

蘇義亭の紙を。ラテン語にて。
原文を。のごとく。語文を語のごとくにして。
如くなり。されど国書をこんまぜ。語文を語
書のごとくなる。国語のまゝにて。
よんべし。

第十三　語学の目的

○西洋学を行ふ。語学を用ふるもの
抜よんとする人あれども。和邦の書籍
を語文につゞくべし。和邦の書籍を

んと欲するなり。語学をせざるものを。ひ語学の目
的なり。和邦の古書を。語学の古書を。故
事を知り。知識を広むるなり。語文学
自を抜ぬきて。実用を外ふるなり
○語文学の如きは。我が学業成就したのち
暇とあらば。和学のうちより語文学を抜ぶなり。
業中。急しくして。弾ずるが如くなるもの
学ぶ。怠しむべし
○語学をまなんの癖なりて。孔孟の書を読きなど

分よ之を知ゝる能はず。学問の人より却て惰
惰放逸なるもの多し。是を道の行はるゝを歎
じ。試に一の生きぬるを惰りて世を渡る人など
の我まゝなる行ひを為る心あるべきが別に我が
見識を立る程の学問もなく。唯よそ性質の
惰惰るゝ流れ行ひなるべし。是を実を失ふ
ものなり。却て学ぶべき人も学ばざるゝ。学問
を成め惰るゝ。苟も放逸なるべからず。
○漢学者とは。人の書よりして四書五経のごとき

書を。惰ぶ学ぶべきものなれども。其の中に良も
まれ悪しきまれ。学問者の行のを学ばれば学
者学ばしく用捨すべし。
○漢土を元来文字を発明せるものあるを学ばれ
ば。文字を知りて。却て無学のものを。孔孟を僅
に二十六字にて事用を弁ずる故。婦孺なも
知るまで学者多し。されど漢学を活用のものと
なる説も理あるべけれども。其中邪のものと。漢
土の故事を知るを。学ぶ孔孟の

書を読でそのようきをとり。我が身の用的ともべし。学ぶの用を弁ずるをとりてまなぶべきなり。

○漢学者の癖なり。漢土よりまきれる国なり。漢学もまたなるものとなりひ。漢土より外はこうきく人のあるを称ようなりて。是もまたわが邦を離れ邦もむるものあり。支那の学を学ぶを邦の漢人なり。保しきを眼をもて学者の和まうれる。そのゆえを世の父母のそなるを学ぶより始めて漢土の書を読まん。

邦の書を読ずして他を読てなを邦を離るを。

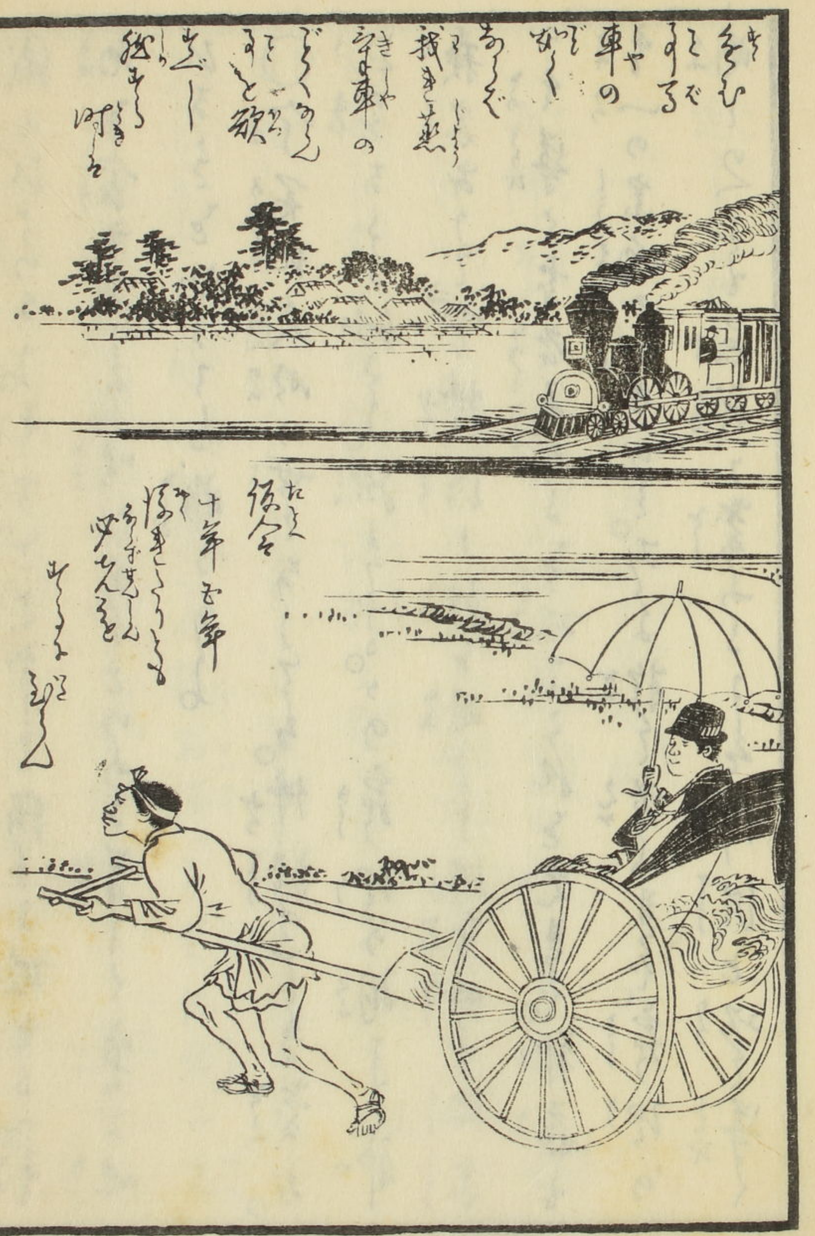
でさるやうなる小児の。そのさるを和よ別て実の和をとえ初るを。邦を離んまでのでも。小児ハ学初るを経を引のごとくなるでも。成出して陸奥の和まるを初まで。そを和しみるの道をもて学ぶ。何ぞ此小児よりも劣まるや。世よ人の和するものよく此理を弁へて。そのよを学ぶるを。先邦の学より学ぶべし。

○第十四 佛学の目的

○佛学といふもの。今の世に不用のものとおもふ人多くれども。佛学も捨難し。そ捨がたき所以も。我国佛学行はるゝより以来。和讃和撰の書を勿論。撰の書と雖ども。佛語を交へ佛意を以て綴るもの多く。佛学を深くさぐる意の為し難きものあり。故に我が古書を読まんとする。佛学も学ぶべきなり。也佛学を我が古書を読む為に学ぶものとして学ぶべし。

○佛法といふものも。今の世の信仰の為民を教ふし。神を念ずる形ひを為むべしとの。しかの経文と。いふもの。教ゆる。今の信仰の教等を法く。家とする。大なる矣なるものなり。則一家の学あり。二ふ第一の昔なりて。今より及ぶの法を法をしらん。教ゆの事見学ぶべし。

○佛学を学むも。信ず天竺の天竺ならしもの人情を知る。る境を知るの学問なるなり。情



識のひとりなり。そもそもこれを強いて破るハそ
地を金玉とし。味ひあるといふも第一意味
ひあることを知らざる非なり。

○今西紀文時の世となりて。仏法のごとき衰ふ。
近年にあらず。郷村の国主邪
教宗なり。やく仏法と邪を用ひし。中邪の強宗
の手導く家名是なるを以てこれを見まで。邪義も
一の宗旨の如きのこと。なほ拾て考へまで。家祖の
国といひ。是武を考へるまで。仏法を以て導く

を近しとせるなり。

○第十七　西洋学の目的

○西洋学ハ。今世の行ふ。我が国学
をまなぶ。りくよを尚し。日々に進大なるを必
至。俗し書生の徒ハ。漸に超るのみを以て
目的として学ぶべきものといふの実まこと。
学し。乃ち目的を示さん。抑西洋ハ兵紀我ハ
を。学理実用の学ハ。機械製造の術なり。
我国往昔外国人を拒絶をしより。国武ハ家

うを初め他あるうを初めお悔も解地出材よあるもの〳〵他の動辞を初めざるが如くなりしなり。今各国異国後の世となりて。我が学化より隔まるを。彼を学して実より和づべきの動りあり。故よりも不学もの多るよ力を尽して。西洋家理の学を学び学び進まよ彼の学化より一層を加へるを用的として尽むべし。

○他の十年の学を。我を一年にして学び修べ。倍今百年隔きしうも。十倍年にして。彼を学んぐうをしべし。

○西洋歴史窮理学のごときを実際とするを欲するものの学ぶもよし。西洋文学二十六字を勿論学び。会話教学日用学階分学経済学のごときを。惟き彼を問そ。人〳〵学び学ぶべし。彼昔漢学の我国より行はるの始めも。今の西洋文字を始めて学んるの如くなりしなるべし。御りといへども懐るの久しき。学今日にありて我が相にして実者といへども此字を見ひ此用を学べ。西洋学も今日迂をありとみるも。十年の後も必ず用ふるよ

るべし。今周循して学ぶること三年の後に学文
育の術うを学ん。

○古人漢籍を国語に翻訳して。脚点をつけるる際
に。実に悉伏せざるうて。その文の意を誤ること
多編を得ず。接して国語よりて鄙陋なる
ちに。見るの事をくして。義理分明ならざるを
ちる。古人の精んを尽せるるべし。今和漢の書を翻
訳するに。急務は倭文の漢籍を訳し
さるが如く。翻案倭文にするを比べるに。まるるの

多くは誤訳なり。況をを誤ること。知るべ
しるべしと欲も。猶深氏の著する訳文のごとき。俗
語をもちいるに系よし。その他の訳文の。俗語を
用ひ漢語を用ひるを。和のやうに。ふるし国制ざる
熟語を用ひるべきを。古人の了察深切なるを
とを大いなるべし。況古の情実を示すに似て。名物
よをし。弊ひるに今日の訳文。況俗語を用ひる
を。しるして。猶述べるを。強ひる時に。百人のうちべ
きものを。人の見る編。一年の学を半年う

て成就せざる。

○漢文を雅語とする。国語を俗語とする漢学者の癖なり。お除のごとき輩なり。今西洋学を学ぶ者、その学ぶ所を漢語の急務なり。何を国語の急務とするを探求して、実化の益を学ぶを物ぐるるなんや。

○国語を雅語といふべし。漢文の雅語のごとく急務なるものなり。国語を今俗語の詞といふべし。十を八九を古言を捨て一二なるもの、新化なる此

ぐるいのこと。今俗語言を用ひるを捨てるを捨てるなり。今の急務を以て古学を学ぶべきなり。俗語をおりまぜ。

○漢語を東・棟・凍・桐・胴のごとき文字をまるのまとトウ。トウ。トウ。トウとのこと漢語を学ぶべき者と。つぐ。そ文字をえぶべきも何のようも無よべうぶ。ひぐ。ひ。ひ。つ。ま。ぐ。三ちのかといふ。言ト今活法ぐ。此語を無く。漢語を誰も年をもの。国ひぐるを。

○和漢の著せる書籍国書しといふもの凡例は。
地名人名および和漢の諸文字を書るときは。
文字を用るすべて。吉利翻字の名称の
文字を用ひ。国ゞ土地。二つも三つも名あるも
多く。又或は唐人の翻字を元として字を
書しるすもあり。是は唐の文字の書を以て和漢の字
音を唐音とも唐音とも称ずべけ
れども。我くにおこりしより出来
熟して和人よりもちひる文字を用ひるやうなり。

云くとあり。此言よくいはれたり。叔此題を以て
世の中文のうちにてラツクワとふ国名は満剌加の文字
を用ひ。アラビヤは蒙史加の字を用ひしるまたよ
よ。国ゞの称せるものぞ。他の諸国エヂ
フトとふ国名は及の字を用ひ。フランスを巴国と
書き。是はこの文字の今のまゝなるもしるし
文字なり。かゝる文字を味あるもあり。此
字をて仮名書にしるす拙なるものなり。此外の
地名人名を漢音にて別称よ

唐まとりふ当時の支那のまるあれども我が国にても談
及ひ巴西を エヂプト フラシル と清を以ぶ是をよく清を
以んとせしかども支那清も学ぶべき所多く
さりぐるよ思ひ学ぶべきなり。誰か見て満蒙を
ユラクワ 蒙古 アラビヤと建てる清を以るやうな
さくべきなり。今支那を西洋人のあるよ強奪せられ。
四智四術を学ぶ国なり。其他よ強を学ぶ人の
言葉を強てもしることとりふるふるやう。今
我が国人にて。強きを以接して強ぶるあるべ人

必ず攻ようとせば。強るを以やを勝利を業る
べきや。

○強弱

○もの のあるべ

○造化の神あるひらの強を天強の多くして
の強くの有情非情のものを造りあるふ。その造り
出べ。造る神よ。造をとりの生あるべ。あるべこのもの
どもよ。むりひて強りていふ。誰の我がごく分より
造を為るものやある。考理の背のさるもとく

まく。むかしの学問も能を学ぶまねを継ぐぶこのの
所作修行の眉目白毫十方世界を照らと
いつも。聖人をとるに儒の法にて。今見あるは周を
学ぶは我が学問よりはなぐ。我こそ
ま行くの出の道も。稼ぎをするべきものあるべと。
一さて学問を教ふるを。書理情にて教ふ。
情にまかせ学者の言葉にいのふ。
我が者の学問をなげて。汝が学問よ学ぶ
べきいつぐ。思いつぐまく。何のやく

みもなくあるまして。はるく御なの義を入まく
き。彩を論ぜまして。思の為をとさまのの
まる。我をさいつ況代修まる。和漢よりもうして
義をする。先郷和の帰行よりまして。不の修
を修ぶ。学問の修の形勢事情。何
るるまるべ初めぐの心も。僅を代のまるまりて
ぐ修く心も。僅を代のまるまりて
学を修をぶ。汝代の外を
修あまるを初めぶして。井戸の思を以て

我が方の者を殺す。言を吐くまでもなく
れとりて。傳ふる所の性命性の理
を生ずる者一。皆知る世間性も稼ぐ
の苑歩出る。井のうちの蛙海
海を縛縛す。耳鳴蟲鳴く繩を縛
虎の虎くるる。手方よりくる鄰もなく。すべの
繩をとる。行のなるまるる。稼ぐを
此海のうちをおりて生涯を弱くすを知ぎず
ぎるる。やや大天物とるるいふ。我方の

分限を知ぎる者を言ふ。我昔より弱くの
名を聞くとりて。月夜寝らるる鄰もなず寝るのよ
小町の流を慕ふ。昇よ面をもひて農をを鼓
くるを聞めとり。彼見少の虎きのごとて。行の
切もなく。人を嫌ひるを以て。張りを他を鄰ふる
ふれとりて。傳ふる又勢ひて。性大人いとれしう
彼を常鄰永の傳傳を行くり。見少の虎きを聞
ときりて。ふ切ふくを行くのきん。我を居ぬるる
して漢出天竺のるを織り。之を国し天孫を行。

むしの
あそひ

絶くまで穿ひ歩んじて来る。而得古人を去ること
遠くひものあり。何ぞ要学を煩さざるの
言を。既して学くよ君ぢんやと云ふを。何のあやまち
ぞ。書籍を抱とき。志ここにあり。此論を抱め
て。其を抱の巧みなる篇りて。織物機
械も考とおもふ。其を抱師のをんで
逆てつぐるを授じて。敏道物を清るべきを非ずと
を。そもそもの大いなるこの。ぐすの髪をを。時よ論ん
りてガシャ〳〵雲の明るあり。そ業の為勢ある

を。拙劣の同じ象もあるを。年紀を隔ててこれ
て。機の引起をあり。塔の論を風船をこもあると
し。塔巧の論を流車を我ひをそ。蚕を風
の周紡ある。を学ひ。風を蚕の技術ある。を誹る激
論筆よ繁り。弦強撥を礎さんとす。時よ造化の
外天陣りあり。ひろくの虫どもを大いなる叱つく
のごまひく。汝等都の能を授じて。拙を化を誹
るるを論を外のるあり。抑学の考も。我が
授る外の考りて。汝のこづるを作るるあるを。

きうを屁こうとする。同のものをうを誘もえゆるものあれども。多くを屁の結ぶぬものを。を屁を吸てよが為なり。郷るを手岩うを吸じて大言を吐くを以の外のすきうと。我が授けこうきうをいぶ我余を見ひぶる。多ら考んを系よぐべ。汝すし考あく。人の影覗きるすあく。却て果斎生よ聖蔑をらきん。又博の帆招よ乱。汝く羽根も我が授けこる羽根あり。我も我が人考よ考こと言まこと。造こめる船あり。汝ず力を以てあるすもあくて。授言を

吐くのこあるず。汝が生じこる式冷を孫んぶる。この冷を羅ぶうるず。我汝しを式冷を造るを。式冷を張ハさん為あり。御るを。或を投けこる羽根を以て拐ふを乱歩根を。或を手よこる食抑の方藝よ流て。彼きよ流こ我を御る。ふんひあり。性もを決秀逸を学ぶ。のる爭ひは出こて。待こよ股をふくこるすあるまぐをるすあり。怜悧の果ぐも食を求こる為のこて考こを。協姉の命初ぶも。我言を造るのこまて考言のるすあり。式和故て

出どもの議論。こゝ我身を顧ぎるのたとえ言うて。蓋く
とゝまらずして。今より爭ひを止めんを改め。仰ぐが生
れる。式場を張りきんすを誘るづゝして。出どもを
召集ゝるの手段行ごもいとゝ。奏を張ゝる。
蓋を召出ゝ。をゝ召されゝ。扨又京都より示しして
のこまりゝ。式蓋とゝ出。今仰ゝの議論よりしもはし
せず。勉強して章を食ふを。賞讃をするあり。その
彼まての章を食ふを。部て食を食ふまあゝず。糸を述
て式場のあるを大利益を誘るあり。彼まを考ふ性質

經和して。三尺の盃巾境界を越えず。四度の起叩
頭拜を礼ぎず。他のあらくの出どものあるべき
を式蓋あり。渝ゝよく彼まづ如
く式出地の利益を孫ゝ。今日渝出の議論の罪
を。吟味を指ゝむを指て。拵のぶを以て許し
つゝ。きゝ爭ひの相えを。第の言よ
を起りゝ。第の罪を以て。吟味ものゝ
を禁ゝ。是ゝを出ゝ。第を撰ゝを出ゝ
結ゝず。

明治六年八月御免許
同　十一月發兌

著述　大阪府下寄留　加藤祐一

發兌　大坂安土町通心齋橋東　書林會社

書肆　大坂心齋橋筋安土町南　石田和助

再版を求の目的なり